

行徳湿地の特長のうち強調したい機能

①東京湾干潟と比較した特徴と三番瀬とのつながり。

本来の河口部における自然地形は塩性湿地植生を伴う泥質の干潟で、陸域から干潟面にかけてはヨシやアイアシ群落を基盤に、ハマツナやシオクグなどとともに塩性植生が広がり、その先に泥干潟が広がっていた。このような地形は、現在では埋立てや人工海浜造成のためほとんど消失し、三番瀬を含む残存あるいは造成された干潟の多くでも、塩性植生帯や高潮部のない、低潮域を主体とした砂質干潟となっている。

自然地形に備わっていた塩性植生帯や泥干潟の高潮帯には、ベンケイガニ、オオユビアカベンケイ、クロベンケイ、ウモレベンケイなど人々の関心を引きやすく、かつ希少性の高いカニ類やさらにはトビハゼやカワアイなどの希少性の高い種が生息している。このような環境は、現在では人工的に造られた新浜湖や江戸川放水路で残存しているが、三番瀬内には存在しない。したがって、三番瀬の再生にあたっては原風景と生物群集の回復が求められ、塩性植生帯と高潮帯の泥干潟の再生が求められる。

新浜湖の地形と生物群集は、三番瀬の生物群集の再生にあたって子孫供給源として重要で、本来は新浜湖がより陸側の汽水環境として三番瀬と連続して存在すべきである。現在のところこのような環境再生にはかなりの時間がかかるものと予想され、それまでの希少生物の個体群保全の場としての機能が、新浜湖に求められる。

②浅瀬、干潟、汽水湿地、淡水湿地について、特徴的な生物の生息地。

⇒参考資料5-3 行徳湿地の目標生物による。

③陸地から海までが干陸→後背湿地（淡水）→汽水湿地→干潟→海水域としての連続性。

- ・ セイゴ水道+ウラギク湿地とその周辺水路
- ・ 三島池とその沖部（現在は水没）

④湿地環境の特徴を市民に体感しご理解いただく場。

- ・ 湿地環境の特徴とは？
- ・ 現在、行徳湿地内に湿地環境を体感できる場所はあるか？
- ・ 湿地環境を理解いただくにはどういう取組が必要か？

⑤保護区の自然環境再生の取組みの歴史を紹介。

- ・ 保護区の自然環境再生の取組みの歴史を整理する。
⇒参考資料4-7を参考に行徳野鳥観察舎内の写真の展示も併せて検討する。
- ・ 自然環境再生の取組みを現場で表現（イメージ）させるには？
⇒自然環境再生の取組みの象徴的な施設・環境の展示（水車池の水車？）。